

「羽包み(はくくみ)」

第16号 平成29年12月1日発行

自立援助ホーム「湘南つばさの家」

〒253-0022 神奈川県茅ヶ崎市松浪 1-12-17

TEL・FAX 0467-58-6260 shonan-tsubasa@marble.ocn.ne.jp

〔郵便局での振込みは〕 ゆうちょ銀行 振替口座 00200-5-81277 自立援助ホーム 湘南つばさの家

〔銀行からの振込みは〕 ゆうちょ銀行 店名：029 当座 0081277 自立援助ホーム 湘南つばさの家

旅を歩む

ホーム長 前川 礼彦

旅をさせて頂いている。長い人生の旅だ。

振り返れば様々なことがあった。そしてその時々で守って下さった人、共に活動した人、縁あってある時期やり取りを積み重ねてくれた人がいた。出逢った人には全て感謝したい。

人生がどうだったか問われれば、苦しかったかもしれない。しかし幸せもあった。

そして自らの想いを形に出来た。湘南つばさの家という、家庭に代わり少年たちが暮らせる家を創ることが出来た。そこで出逢った少年たち。苦しい環境でも健気にそして悩みながらも歩む彼らを傍で見てきて、時に守ってきた。

このつばさの家がなければ出逢えなかった支援者の方々。応援して下さる想いについて、お一人お一人を思い浮かべ、その生きる姿勢に学ばせていただいた。

この身体は借り物。当然の様に自分の物と思っていたが、出来ることなら日々大切にしたい。身体の声を聴き、労わるということは、結果として自分の想いに付き合ってくれるこの長い旅を歩ませてくれるということであり、心を磨く時間を増やしてくれるということなのだから。

心は磨かれる。長い苦悶があったとしても、必ず転機は用意されている。

だからその時が来るまで身体の声を聴き、自身を大切にしてもらいたい。出来るだろうか。変わらないものを大切にしてきた。変わらない場所、変わらない存在。しかし人は絶えず変化し、環境や形ある物は変化や発展を遂げながら、時代と時代を繋いでいく。

その時代で活躍する人がいる。細かく見れば連鎖の様にあらゆる機会を通しバトンを渡しあっており、人の想い、言葉、行動、それらが人と人を繋ぎ、形を変えて受け継がれていく。

湘南つばさの家も存在する限り、その場を通して人と人が繋がり、少年たちも大人たちも心を磨いていくのであろう。

人は決してひとりでは生きていない。この通信を読まれた支援者、関係者皆さま、そして少年たちの人生が、人を通して少しでも豊かになりますように祈っています。

未来に向かい湘南つばさの家が続いていきますように、引き続きご支援を頂けましたら幸いです。



つばさの家 支援者紹介

今回ご紹介します島田さんは、定期的につばさの家にお越しいただき、傾聴を教えてくださいありがとうございます。島田さんはいつも相手の気持ちを汲み取り、相手を尊重して温かく優しく接していただけます。その姿勢は見習わなければならず、島田さんはとても尊敬できる方です。私たちスタッフの悩み相談にも乗って下さり、いつも感謝しています。今回、ご寄稿を頂きありがとうございました。(野田)

傾聴ボランティアを通して学ぶこと

島田高範

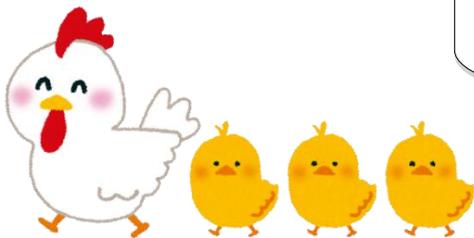
私、つばさの家の若いスタッフと傾聴のお勉強をしています。少し、解説します。

傾聴って、相手の話しを聞くだけのことだろうって・・・違います。話しをしても、聞いているんだか、聞いてないんだか、判らない経験ってありませんか？話していて虚しくなる瞬間です。良好な人間関係はできません。

傾聴とは、相手の気持ちを聴くことです。突然ですが、バリカタ（湯に潜らせた程度）の麺で博多ラーメンを召し上がったことはありませんか？麺を少なく感じて、替玉（麺のおかわり）を軽く食せます。最後にスープを頂きます。この時点で満腹感はありません。暫くすると、お腹の中の麺が汁を吸ってどんどん膨らんでいきます。これが、傾聴の極意です。相手の気持ちをどんどん汲み取るのです。

さて、傾聴のお勉強を通して、四十歳以上の年齢差を埋めて、若いスタッフ諸氏と良好な人間関係を構築できたと自負しております。そして、私が何より大事にしていることは、彼等から学ぶ姿勢です。若い世代との意識格差があることは否定しません。だけど、周囲を見廻すと、合点の行く感情が散りばめられています。私の宝物です。傾聴を学んでいて良かった、それを実践する場を与えて頂いた前川所長には、感謝の気持ち一杯です。

自分の思いを素直に話せ、受け止めてもらえる。そんな関係性の中で自分の思いを話していると、自分自身、気が付くことが沢山あります。これこそが傾聴なんだと島田さんの勉強会で日々感じています。少しでも自分も子ども達とそんな関係が築いていけるように頑張りたいです。(牧野)





つばさの家 スタッフ奮闘記

スタッフ2年目になり思う事

牧野真由加

最近、最初につばさの家にボランティアとして関わり始めてから、丸10年がたったことに気が付きました。長かったような、でもあっという間だったようにも感じます。

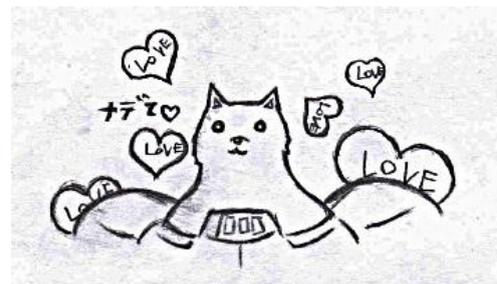
そしてつばさのスタッフとして関わらせていただくようになり、2年目になりました。子ども達と関わり、落ち込んだり悩んだりする中で、どうしたらよいのだろうと考えていくたび、自分自身の課題に気づきます。子ども達に何かを伝えたい、きちんと向き合いたいと思っていてもなかなか上手くいかずに悩んでいました。

なぜ上手く伝えられないのだろう、前川さん達との違いはなんだろうと、前川さん達が子ども達と話している所を見ている中で自分との違いに気づくことができました。私は自分自身があやふやな部分があり、自分自身がまだ悩みながら、迷いながら話してしまっていると思いました。子どもにも「牧野さんとの話は～しなきゃと言う感じで言っていて、牧野さん自身の言葉でない様に感じる」と言われたことがあり、その意味が良く分かりました。誰かに何かを伝えたり、向き合ったりするにはまず自分自身ときちんと向き合い、自分は何を思っているのか、どうしてそう思うのか、そういうことをしっかりと考えて行かなくてはいけないのだと思いました。

また私自身が他人に何かを伝える時に、直接的に何かを伝えることが苦手だと言うことにも気が付きました。何かを直接的にはっきりと伝えると自分が傷つくこともあるのかもしれない・・・。そんな自分の弱さがあるのだと思いました。この仕事をしていくには、自分の中にある弱さなど、自分自身としっかりと向き合っていかななくてはいけないのだと思います。

自分の目指している先にゴールは無いんだと思うんです。少し進んだと思ってもまた次の課題がどんどん出てきます。とても長くて遠い道のりに感じることもあります。でも数年前より今の方が、数か月前より今の方ができるようになったことも増えてきたのではないかとも思います。自分が頑張れば頑張るだけ成長できる、だから頑張ろうと思えます。いつも周りの先輩スタッフや前川さんご夫妻に助けて頂いて頑張っていくことが出来ていると思います。

これからも少しでも成長し、子ども達の為に何が出来るのか、そのために自分はどうしたらよいのか考え続けて行けたらと思います。



(右図は入居者T.K君の描いたイラスト)



祝 白十字会林間学校 創立 100 周年!!

2017年11月23日、湘南つばさの家の運営の後ろ盾となって下さっている「社会福祉法人白十字会林間学校」が創立100周年を迎え、記念式典を行いました。白十字会林間学校はつばさの家から徒歩10分程にある児童養護施設で、創設時は体の弱い子どものための寄宿舎型学校として始まり、「日本で初めての養護学校」として時代と共に変遷してきました。当日は約300人強の関係者が集まり、つばさの家の支援者方々も多数ご列席を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

式典では市長の挨拶や100年の歴史をまとめた映像の上映、シンポジウム、子ども達や職員による校歌斉唱があり盛況に終わりました。場所を移動し祝会では林間学校の園庭で出店を開き食べ物を振るまい、子どもたちは出し物を披露し楽しい時間が過ぎました。



100年前に子どもたちの未来を想い、制度はなくても必要なものを創ってきた創設者たちの魂を受け継ぎ、今を任された我々も時代のニーズを捉え、「ないものは創る」という社会福祉の精神を実践していきたいと改めて確認した日となりました。

(左写真は100周年式典の様子)



大学進学之道 ～OB (J君) からの手紙～

つばさの家から初めて大学進学した青年も、現在大学2年生になりました。来春には3年生です。支援者皆様からのご支援のお陰様で、何とか学業と生活を両立しております。本人から近況が届きました。

早いもので大学生活もあと少しで半分が過ぎようとしています。この2年を振り返ると、どちらかというと勉強より趣味である珈琲の事を考えていたような気がします。今までは基礎的な内容の授業がほとんどでそれでも大丈夫でしたが、これからはより専門的な学びが増し忙しくなると思うのでしっかりと勉強に力を注いでいこうと思います。

また、進学の最大の目的である教職課程も順調であり、つい最近介護等体験を終え様々な貴重な学びができました。施設出身者にもかかわらずこのように十分過ぎるほどに学べる環境があるのは、つばさの家や社会的養護に関心、理解のある皆様のおかげです。そのことを忘れずあと2年、よりいっそう専門分野に力を入れて頑張っていこうと思うので、よろしくお願ひします。



社会的養護と自立援助ホームの情勢

2016年度に児童相談所に寄せられた児童虐待相談受付件数は12万件を超え、昨年度より2万件近く増えている。地域の関心が高まりつつある背景もあるが、年々右上がりが増えていく現状に社会的養護システムはまだまだ未整備であることを表しているとも言える。

同年施行された改正児童福祉法において、自立援助ホームにおいては対象年齢の引き上げがなされた。大学等の進学者に限り22歳の年度末まで対象となったのである。一般家庭でも大学等に進学する青年は全体の7割強(74.1%)であるのに対し、児童養護施設等入所中の児童の進学率は全国平均でわずか2割強(24.0%)しかない(※2016年厚労省データ)。社会的養護を受けた児童の自立支援が強化される中、一般家庭同様、大学等進学を実現すれば、将来の進路の幅が広がり生涯賃金も大きく変わる。近年児童養護施設の取り組みで大学等進学する青年も増えつつあるが、進学後の課題としては学費や修学、在学期間の生活の維持と経済力、つまり学業を修めながら生活や就労の両立を果たさなければならない。これを親元の支援がなく自ら成し遂げなければならないということである。進学をした社会的養護を受けた青年の1/4は中退をしてしまっているとも言われている。一般家庭の約3倍である。(※2016年B4Sデータ)

自立援助ホームではかねてより、20歳を過ぎても支援が必要と訴えてきた。一般家庭においても大学等卒業年齢あたりまでは何らかの実家の支援がある場合も少なくない。児童福祉法は原則18歳未満が対象であるが、青年期支援を丁寧にする中で、予後の生活や経済力が安定し、貧困や虐待の世代間連鎖を断ち切る要因にも繋がると期待できる。

対象年齢が拡大されたのは喜ばしいことであるが、自立援助ホームに来る青年たちの学歴は中卒24.5%、高校中退30.5%、高卒18.1%と大学等進学以前の状況である。(※2016年全国自立援助ホーム実態調査)この改正児童福祉法において我々関係者は国に対し大学「等」進学の中に、再チャレンジなどでの定時制高校、通信高校在学で20歳を迎える場合も対象に含めて頂いた。これにより希望者にはより学歴への支援を充実させることができた。

課題は前述した「進学する青年だけでなく、20歳の誕生日を超えても支援が必要な青年への生活支援」である。国は進学者以外への支援施策として、「社会的養護自立支援事業」を制定し、条件はあるが22歳までの支援施策を図った。しかしこれは予算事業であり、自治体が予算化しなければ効力を発揮しない制度だ。当法人が行う退所児童等アフターケア事業の「あすなろサポートステーション」もこの事業に組み込まれたが、自立援助ホームの様な生活支援型の社会資源で20歳以上を支える「青年期版の自立援助ホーム」はやはり必要であろう。

国は更に有識者による「新しい社会的養護ビジョン」を打ち出した。このビジョンでは「子どもが権利の主体」であることを打ち出し、特別養子縁組の推進や施設養護、児童相談所の抜本的機能改革などが挙げられ、その数値目標や工程が具体的に示された。しかし現場ではあるべき理想の方向性と現状の乖離に混乱の声も上がり、近年自治体単位で取り組まれた家庭的養護推進計画の見直しも懸念される。

社会的養護から社会的養育という枠組みの拡大にて、施設養護から家庭養護への推進とも受け取られるが、そもそも家庭機能が何らかの事情で弱まったときに、家庭に代わって補完をするための社会的養護であったはずだが、家庭養護を支える仕組みの充実には、いつの時代も家庭とともに社会的な存在の必要性があったはず。それが親族や近隣、社会資源そして社会の人々であったのではないか。子どもの養育において家庭養護を推進するあまり、結果として再び家庭が孤立し、支え手がない仕組みにならないよう願っている。(前川)

支援の継続をお願いします!

いつもご支援ありがとうございます。自立を目指す少年たちを支えていくためには、皆様からのご支援の継続が欠かせません。ご支援をして下さる方は当支援会の会員（無料）として、今後もつばさの家の活動報告をさせていただきます。

物品のご支援

ホームでは食品に関するご支援を継続募集中です。現在ホームで切らしているものは「**食器用洗剤**」「**鶏ガラスープの素**」「**マヨネーズ**」「**味噌**」です。食品保存用のラップやアルミホイル、洗濯洗剤、タオルなどの生活消耗品は何でも助かります。また、野菜が高騰しており、野菜や果物等もありがたいです。朝食にはヤクルト、ソーセージ、パン、ヨーグルト、野菜ジュース等を出しているのです、そういった軽食も助かります。

1人暮らしをしている青年達が毎年、増えていきます。体調を崩すと収入に直結してしまう危うさがあり、食べる事を怠る子が多くいます。仕事で忙しく、きちんとした物を作れないようです。レトルト食品や材料をいれて混ぜるだけという手軽な食品は人気です。年に数回、小包で届けるのですが、どの子もお礼の連絡をしてくれています。大好評です。そういった品物があれば送って頂けると助かります。

また文具、マンガ、週刊誌、ゲームソフト、楽器やスポーツ用品などがあると少年達の余暇も充実します。今年の冬はスキー（スノボー）に行きますのでウェアや関連用品があれば助かります。また海が近いので釣り用品も助かります。定期的にフリーマーケット等にも出店しておりますので、バザー用品もありがたいです。

経済的なご支援

現在つばさの家では、進学者の学費や資格取得、制度で足らざる生活費の一部を基金として募っています。少年たちの夢の実現に継続的にお力を貸して下さる方を募集しています。定期送金も大変助かります。宜しくお願い致します。（送金先は表紙記載の口座です。寄付控除の領収書も発行出来ます。）

<家電製品資金援助募集>

つばさの家は11年が過ぎ、オーブンレンジや冷蔵庫、掃除機に洗濯機と相次いで壊れ始めました。年月の移ろいを感じますが、これらの家電製品が子どもたちの生活を毎日支えてくれたのだと改めて実感します。10周年が過ぎ新たな時代のつばさの家を支える家電製品をリニューアルします。物品はサイズや機能があるため、大変申し訳ございませんが資金援助を希望させていただきます。どうかお力添えをよろしくお願いいたします。

（編集後記）

今回初めて編集を致しました。ご助力を頂きながらの作業でしたが、ゆくゆくは支援者皆さまにお読み頂ける様にメインで頑張りたいと思います。今回、ご協力頂いた方に厚く御礼申し上げます（野田）

○発行責任者：湘南つばさの家 前川礼彦 ○編集担当者：野田裕人